

# だんろ



小学校における「人権の花」贈呈式

2024

上 三 川 町  
上三川町教育委員会

# あいさつ

人権は、人間の尊厳に由来する固有の権利です。

昭和二十二年に施行された日本国憲法においても「国民主権」「平和主義」と共に「基本的人権の尊重」が三大原則の一つに位置付けられており、すべての国民が基本的人権を享有し、現在及び将来の国民に永久不可侵の権利として与えられています。この権利が保障され、一人一人が自立した存在として各々の幸福を最大限に追求できる、平和で豊かな社会の実現は、すべての人々の願いです。

一方で、人権を脅かす事例は枚挙に暇がありません。

個人に対する誹謗中傷やプライバシーの侵害、特定の外国人を排斥するヘイトスピーチ、部落差別（同和問題）など、人権侵害の問題は未だに存在しているのが実情です。

このような中、本町では昨年2月に「上三川町人権教育・啓発推進基本計画」を策定し、「人権施策の推進に関する基本的事項」「人権に関する課題」ことの施策に関する基本的事項」を定め、その目標を達成するために必要な推進体制や関係機関との連携の在り方を明確にしました。これまでも様々な人権施策を実施してきたところではございますが、偏見や差別のない社会の実現に向け、当計画を基本とした取組みを進めてまいります。

さて、今年度も町の人権施策の一環として人権啓発冊子「だんろ」を発刊いたしました。当冊子には、町内の小中学生が実体験を通して感じる人権への思いが、作文や標語を通じて綴られています。

町民の皆さまには、一度お目通しいただき、人権と向き合うキッカケとしていただけますと幸いです。

令和六年三月

上三川町長 星野光利



# 目次

## 人権に関する作文優秀作品

障がい者だって同じ人間

小学四年生

.....

1

しょうがいがあっても

小学五年生

.....

3

みんなのしあわせ

小学六年生

.....

5

人権の成り立ち方

中学一年生

.....

7

個性が輝く未来へくへアドネーションの経験からく

中学二年生

.....

9

生まれつきの障がいに対して思うこと

中学三年生

.....

11

## 人権に関する標語優秀作品

.....

13

## 人権に関する作文優秀作品

障がい者だって同じ人間

小学四年生

ぼくのおばあちゃんは目が見えません。もうまく色素変性症という視野がせまくなる病気です。この病気には治す薬がありません。おばあちゃんが中学生だった時、くらいところが見えなくて歩きづらくなったのが初めの症状でした。それから少しずつ視野がせまくなっていってしまい、今では全盲になってしまいました。

おばあちゃんは、生きていくのが大変です。理由はたくさんあります。まず一つ目は、差別されてしまうことです。目が見えないということだけで、いろいろなひどいことを言われたり、されたりしてしまいます。以前、スーパーで買い物をしている時に、さいふをぬすまれてしまうことがあったそうです。この話を聞いて、ぼくはそんなひどいことをするなんて、許せない。おばあちゃんがかわいそうだと思います。

二つ目は、一人で行動できないことです。全盲のおばあ

ちゃんは、だれかがいないと買い物などいろいろなことができません。目が見えないから運動もできないため、家の中でエアロバイクなどの運動をしています。おばあちゃんは見えたらやりたいことがたくさんあるそうです。それは、自転車に乗ること、車を運転すること、旅行に行くこと、一人でスーパーに行くことなどです。おばあちゃんはやりたいことを知って、あることに気が付きました。それは、ぼくがふつうにできることがおばあちゃんにはできないということでした。それを知ってとても悲しい気持ちになりました。

おばあちゃんはやることがたくさんあります。しかし、おばあちゃんはすごく心が強い人です。おばあちゃんには「鍼灸師」の資格を取り、毎日仕事をがんばっています。「鍼灸師」というのは、鍼やお灸、マッサージなどで、体のいたみを取る仕事です。おばあちゃんはそのお仕事を三十年以上も続けています。また、おばあちゃんほとんど一人で家事をやっています。かたいキャベツなども一人で切ったり、せんたくものをほしたりしています。もし、目が見えなかったら、ぼくは何もできないと思います。また、おばあちゃんのすごいところは点字を二ヶ月で覚えたことです。ひらがなや数字など百こ以上ある文字をたった二

ヶ月で覚えたのはとてもすごいです。

障がいを持っていてもおばあちゃんのようにがんばっている人はたくさんいます。障がいがあってもなくてもみんながおたがいをそんけいできる社会になれば、世の中はもっと変われると思います。ぼくもおばあちゃんのようにチャレンジして、おばあちゃんをこえられるような心が強い人になりたいです。そして、障がいがある人が今よりもっと活躍できる日本になるように変わってほしいと思います。

しょうがいがあっても

### 小学五年生

今年、上三川小学校は創立百五十周年をむかえ、その記念行事として、佐藤ひらりさんのコンサートが行われることになった。佐藤ひらりさんは盲目のシンガーソングライターで東京パラリンピックで国歌を歌った人だ。

ぼくは、コンサートが始まる直前まで「目が見えないのに、どうやってキーボードをひくんだろう。ちゃんとできるのかな。」と思っていた。

しかし、演そうが始まってその考えは一変した。ひらりさんは、歌いながら軽々とキーボードをひいていた。歌声はとてもきれいで気持ちがいい。そして、みんなを楽しませるその姿に、ぼくはとても感動した。

ぼくは初め、しょうがいがあるひらりさんをかわいそうだと思っていた。だいじょうぶかなと心配さえしていた。でも、ひらりさんはとてもいきいきと生きていて、音楽に夢中になって、とても楽しそうだった。しょうがいがあるかわいそうという自分の考えはまちがいで思い込みだったと気付いた。そしてかわいそうという思いはそんなけいに変わった。

あの有名な音楽家であるベートーヴェンにも耳が聞こえないというしょうがいがあった。だんだんと耳が聞こえなくなつたベートーヴェンは、一時は死ぬことも考えたそう。しかし、ピアノの仕組みを利用して、口にくわえたタクトをピアノにせつしよくさせて、歯で振動を感じ取って作曲を続けたそうだ。

生まれたときから目が見えなかったひらりさんも、だんだん耳が聞こえなくなつたベートーヴェンも、音楽が好きだという強い思いをもち、あきらめず努力することで、パラリンピックで歌うという夢をかなえたり、今でも世界中の人に演そうされるすばらしい曲をのこしたりできたんだと思う。しょうがいがあっても、それを乗りこえて人々を楽しませたり感動させたりすることができるんだと思った。

ひらりさんのように生まれつきしょうがいがある人もいるが、ベートーヴェンのように大人になってからしょうがい者になる人もいる。パラリンピアン山本さんは、十七才のときに事故で左足を切断し、高校卒業後に陸上競技を始めたそう。事故で足を切断するなんてつらかったにちがいない。しかし、義足を「かっこいい。」と感じ、北京パラリンピックで銀メダルをとるなんてすごいと思う。

でも、どの人も苦しみや悲しみがなかったわけではないだろう。最初からすらすらとうまくいったわけでもないだろう。しょうがいのあるなしに関係なく、夢をかなえるには、できなくてもあきらめないこと、強い気持ちをもつことが大切なのだろう。

ぼくは、しょうがいに負けることなく夢を達成する姿から、人間の強さやすばらしさを学んだ。ぼくも、自分のよさを生かして、あきらめず努力できるような人になりたい。



みんなのしあわせ

## 小学六年生

僕のおじいちゃんは、手術をすることになった。以前から腰が悪く、場合によっては、今後、車いすの生活になるかもしれないそうだ。これまで、僕の親せきでは、車いすなど周りの助けを必要とする人は、幸いにもいなかった。だから正直なところ、障がいをもつ人の暮らす環境に対して、あまり身近なこととして気に留めてはいなかった。でも、今回のおじいちゃんことで、僕は急にハッとさせられた。大好きなおじいちゃんを守りたい。でも、車いす生活になったとしたら、果たして住みやすい環境なのだろうか。不便が無いように、そして不快なく暮らしていけるような環境や気持ちを、僕たちで作っていつてあげたい。そう強く思うようになった。

そして、総合的な学習で知った、「ふだんの ぐらしのしあわせ」「福祉」の大切さに改めて気付いた。これまでおじいちゃんからたくさんさんの幸せをもらった。これからは、おじいちゃんの幸せを守りたいと思った。

四年生の時、総合的な学習で「ユニバーサルデザイン」を学んだことを思い出した。文化や言語、年齢や性別、個

人の能力などに関係なく、誰もが利用しやすい社会となるように、環境を作り上げていくことである。実際、僕の学校を見渡してみても、例えば昇降口のスロープや車いす用のトイレなど、いくつも見付けることができた。又、同じように街全体を見渡してみても、自動ドアや点字の設置、音の鳴る信号機やスーパーのスロープなど、至る所で行くつもの工夫がされていることに気が付く。特に印象深かったのは、様々な所でバリアフリーが進み、設置されている所が多かったことである。バリアフリーの場所が多ければ、おじいちゃんのようにもし車いす生活になったとしても、生活しやすいので嬉しいことだと思う。

僕達の周りには色々な人が暮らしている。障がいをもつ人や、お年寄りや子ども、外国籍の人や男性・女性など、皆それぞれに「自分」があり「個性」をもっている。それぞれ「お互いの違いを認め合い、一人一人が皆大切な存在だ。」ということを、皆が思うことが何よりも大切だと思う。おじいちゃんのこれからの考えることを通して、自分も含めた「みんなのしあわせ」を考えることの大切さに気付くことができた。

学校で学んだことが自分の中で、突然結びついたと思う。幅広い知識をより知ることが大切だと気付いた。おじい



ちゃんに対してだけでなく、目を広げていくことで、もつともつと多くの課題が見えてくるに違いない。

僕に何ができるだろう。おじいちゃんだったら、と考えたように、日頃から相手の立場に立って共感し、支え合うことを大切にしていこう。人が人を大切にすると社会を目指して、僕は、家族や友達、周りの人に、当たり前前に手助けできる人間になろう。

## 人権の成り立ち方

### 中学一年生

もし、自分の家の近所で人が倒れていたらあなたならどうしますか。

これは、つい最近の出来事です。とても暑い日でした。母と弟とプールに行った帰りに、家の近くを車で通っていたところ、母がおじさんが横向きになって倒れているのを発見しました。そのおじさんは、よく近所をうろついていた、田んぼでカラスに餌をあげているところを見たことがあります。私はあのおじさんを初めてみたとき、すぐに「貧しそうだな。」と思いました。髪の毛はボサボサで、白髪で少し黒い毛が混じっていて、清潔とは言えない服をいつも着ていました。正直に言って私は、「迷惑だな。」と、いつも思っていました。とりあえず、いったん家に帰ると、母は、

「助けに行かなきゃ。」

と言って家を出ていこうとしましたが、人が倒れているなんてアニメやドラマでしか見たことがない光景な上に倒れていたのがおじさんということもあって、私はパニックになってしまい、母に

「行かないで。」

と言いました。この時の私は、あのおじさんが亡くなってしまうかもしれないという感情と、逆にかわりたくないという感情が交わって自分でもわからないけれど、母のことがとても心配でした。その時、弟も行くと言い出して、ますます心配になりました。私はもう一度母に声を掛けましたが、

「死んじゃったらどうするの。」

と言って結局、家を出て行ってしまいました。一人家に残った私は、これまでにない恐怖に襲われました。でも、数分経つと母と弟は帰ってきました。その瞬間、私は胸の奥の重いものが軽くなったかのような安心感に包まれました。母と弟によると、倒れていたおじさんのところに行つたとき、通りがかりの人が先に声をかけていて、救急車を呼んでくれて、おじさんは無事に病院に運ばれていったそうです。私は、この話を聞いて少しホッとしました。

「あのおじさんは、膝がしびれていて休んでいたんだって。一人暮らして、電話もなく、救急車も呼べない。自転車も車もなく、歩いて病院へ行けないの。」

母によれば、以前からうちでも庭でよく、休んでいたそうです。

今思えば、通りがかりの人と母と弟の行動がなければ、あのおじさんは治療を受けられなかったかもしれません。その前に熱中症で亡くなっていたかもしれません。私はあの時の自分を後悔しています。「なぜ、容態のわからないおじさんを助けようとしなかったのだろうか。」「おじさんだつて治療を受ける権利はあるのに。」と、改めて思いました。次このようなことがあつても、私は全く声をかけることができないかもしれませんが、周りの大人に相談すれば、その人を助けることはできると思うので、次からはそうしたいです。

そもそも、どうしたらこの事態はまぬがれたのでしょうか。私はこれまで、そのおじさんの行動や見た目だけで、怖いから関わりたくないと判断していました。しかし、誰かがもつと早く話しかけてもつと早く膝の痛みに気付いていれば、こんな事態はまぬがれたかもしれません。このような治療を受けたいのに病院に行けない人がいるということは、小学生の時、SDGsで学びましたが、それは遠い国々のことだと他人事のように思っていました。しかし、今回のことを通して、このような人が近くにいることを知って、とても驚きました。そして、人が持っている権利は周りの人の協力があつてこそ、成り立つことを学びました。

個性が輝く未来へ

〜ヘアドネーションの経験から〜

中学二年生

「なんか変。」

その子の写真を見るなり発してしまっていた。その子というのは母の友人の子供のことだ。その子には髪の毛だけでなく眉さえも生えていなかったのである。母は、その子は病氣と闘っており、薬の副作用で毛が抜けてしまうのだということを知ってくれた。私は幼かったとはいえ、写真を見て言ってしまった何気ない言葉を恥じた。そんな時母は「ヘアドネーション」の存在を教えてくださいました。これが私と「ヘアドネーション」との出会いだった。

ヘアドネーションとは、小児がんや白血病などの病氣や事故などで髪を失った子供たちの為に、髪を寄付する活動のことだ。寄付された髪の毛でかつらが作られ、そのような子供たちの元へ届くそうだ。あの写真の子も白血病だった。私は、髪の毛を通して子供たちの支えになれるのかと、ヘアドネーションの活動に興味を持った。「私も病気で苦しむ子供たちの役に立ちたい！」そんな思いで私は初めて、人の為に自分の髪の毛を伸ばし始めた。調べてみると、へ

アドネーションは寄付できる髪の毛の長さが決まっており、切り口から毛先まで三十一センチメートル以上を必要とすることが分かった。切った後の髪の毛の長さを考えると後二十センチメートルくらい、自分の腰まで伸ばすことを目標にした。二・三年かかるようだが、髪を伸ばすだけだ。始めはそんな気持ちだった。

髪を伸ばし始めてから一年程経った頃。私はこのとき、ただ髪を伸ばすだけではなく、人の為を思って髪を伸ばすことの大変さを感じていた。毎日髪を丁寧に洗い、ドライヤーは勿論、ヘアオイルを付けて髪の毛のツヤや髪質を維持する。髪が自分にとって必要以上に長くなってくると、洗うことだけでもかなりの時間と手間がかかった。「もうやめようかな」そんなことを思いつつ諦めてしまいたいなる自分が嫌だった。でもそんな時は、あの写真の子の姿が思い出された。あの子は私と比べものにならないほど辛く悲しい思いをしている、そんな気がした。だから、あの子を思い出す度に私は最初の頃のやる気がよみがえり、「まだやめてはいけない」と思うことができた。

そして、髪を伸ばし始めてから約二年半が過ぎた頃。気づけば、私の髪の毛は目標の長さに達していた。休日に私は母と一緒に美容室に行った。長く伸ばし続けて切るとい

う経験がなかった事もあり、次には切ることへの不安や抵抗感が芽生えてきた。髪を何本かの束に分けて結んだところの一センチメートル上あたりを切った。切った後鏡にはシヨートヘアの自分が映っていた。切る前の不安な気持ちはなかったかのように、私は清々しいような、誇らしいような気持ちでいっぱいだった。後悔は全くなかった。

ヘアドネーションは一つのかつらを作るのに約三十人から五十人分の髪の毛を必要とする。だから、私一人が寄付したからといってそれはかつらを作るのに必要な小さな材料にしかならないのかもしれない。でも、それが沢山集まれば大きな力になる。みんな協力すればより多くの人の支えになれると思う。私はヘアドネーションをした後学校に行った。シヨートヘアなのが少し恥ずかしかったけれどもみんな、似合うと言ってくれて嬉しかった。そして、ヘアドネーションをした事を先生やお友達に伝えた。先生からもお友達からもお褒めの言葉を沢山頂いた。また、「私もそろそろ切ろうかと思っていたけれど、もう少し伸ばしてヘアドネーションしてみようかな。」「切って捨てちゃうより寄付したほうがいいね。」「私もそういう子の役に立ちたい！」そのように言ってくれる子も沢山いた。私は胸が熱くなった。長く大変な道だったけれど、諦めないで本

当に良かったと思った。

しかしながら、私はヘアドネーションの活動を通してふと思ったことがある。それは、「髪を失った子供たちがなぜこれらのかつらを被るのか」ということだ。髪がないのが恥ずかしいから？可愛く、格好良くありたいから？周りの目を気にせずに生活するため？全てにおいて、きつと共通するのは「普通でありたい」ということだと思う。でも、普通って何だろう。普通なんて私たちの勝手にすぎない。私たち日本人は自分と違うと「この人は変だ」と決めつけがちだからだ。黒人差別やジェンダー問題、障害者差別などにおいても同じことが言えるだろう。実際に、私もあの写真の子を見て変だと言ってしまった。自分と違うからと言って差別するのではなく、その人の個性としてそれを受け入れることができる、そしてそれがあたり前の社会。そうなれば、もしかしたらヘアドネーションという活動は必要なくなるのかもしれない。誰しもが悲しまない、尊重しあうことができる、そんな社会にするために私たち一人一人にできることが必ずある。

生まれつきの障がいに対して思うこと

中学三年生

私は生まれた時から両うでに発疹がありました。両うで全部に広がっています。痒みも痛みありませんが、周りの人達から見ると、じんま疹のように見えると思います。産まれたばかりのころは、発疹がうすかったので、大人になつたら治るのではないかと自分も両親も思っていました。しかし、成長するにつれて、うでの発疹は赤みを増し、更に酷くなっていきました。

小学生になつたばかりのころは、とくに気にすることも無かったので、夏になるとタンクトップや、短い半そでの服などを周りの目を気にすることなく着ることができていました。ですが、小学五年生の夏、私となり座つていた男子が、

「お前のうでのニキビやばくね。」  
と笑いながら言ってきました。そのときは笑いながら

「これは生まれつきのやつだから。」  
と答えましたが、内心とても傷ついていました。うでの事なんて言われた事が無かったので、急に言われてとても焦りました。自分は小さいころから発疹を見てきたので、き

もち悪いともやばいとも思いませんでしたが、周りから見ると、そういう風に見えるということ、この日に初めて知りました。その日以来、半そでの服を着るときには自然とうでを隠すようになりました。隠していても、

「鳥肌めっちゃ立ってるよ。」

「お前そのうで発疹やばいよ。」

など、うでのことを言われることがとても増えました。皆に悪気が無いということは十分理解しています。ですが、やっぱり傷つきます。特に笑いながら言われると、悪気があつて言ってるのかなと思ってしまう。生まれつきのものを笑ったり、ばかにするのはいけないことだと思いません。特に、言われた人はすごく傷つきますし、ずっと忘れずに残ります。私も言われたことは今でも覚えています。

中学生となつた今でも、うでの事をよく聞かれますが、小学生のころとは違い、心配してくれたり、「大丈夫？」などと声をかけてくれる人が増えました。小学生の時にうでの事を言ってきた友達も、

「いやな言い方してごめん。」

とあやまってきてくれました。その友達は、小学生の時にいやな言い方をしてしまった事に、罪悪感をいだいていたらしいです。その言葉を聞いて、私はとてもうれしくなり



ました。悪い事を言ってしまったという気持ちを持つてく  
れていたという事が本当にうれしかったです。今では、私  
のうでの事を理解してくれている友達がたくさんいます。  
うでの発疹が無くなることは無いかもしれませんが、生ま  
れつき持っているこの発疹をいつか周りの目を気にせずに  
過ごせる日がくることを願っています。

生まれつきの障がいとは、その人がほしくて障がいを持っ  
たわけではありません。障がいだけでなく、くせ毛だつた  
り、心の違いなど、なりたくなつたわけではないものを  
馬鹿にしたり、差別したりしてはいけません。こう言つた  
ら相手が傷つくだろうなど、相手の気持ちを考えてから言  
葉を発してほしいです。本当に言われた人は傷つきます。  
もし、あなたの周りに生まれつきの何かを持っている人が  
いたら、周りの人と同じような態度で接することが一番だ  
と思います。そして、私と同じように生まれつきの症状を  
持っている人がいたら、気にせずに、自分らしく堂々と生  
きていきましょうと伝えたいです。

# 人権に関する標語優秀作品

## 小学校第一学年

ぼくがいわれていやなことは きみにもいわないよ

にこにこ みんながわらえば いいきもち

おもいやり やさしいきもちで ひろがるえがお

ありがとう えがおをくれる あいことば

そのことば 一どいったら とりけせない

なかまなら たすけてあげよう そのゆうき

ともだちは みんなだいじな たからもの

## 小学校第二学年

ともだちと いっしょにあそぶ なかよしだ

見つけてね 一人一人の いいところ

ありがとう 五文字で広がる えがおのわ

じぶんがね されていてやなこと しないでね

あの子のすてきなところを 見つけてつたえよう

あの子もわたしもうれしくなるよ

大切にしよう じぶんの心 あいての心

本郷小 鶴見 春太

本郷北小 福島 佳音

上三川小 佐藤 優羽

坂上小 上野 結士

北小 国谷 果穂

明治小 秋山 陽翔

明治南小 大久保 佑夏

本郷小 野沢 侑叶

本郷北小 片山 湊士

上三川小 多田 琴音

坂上小 上野 生翔

北小 石井 葉椰

明治小 大屋 咲希

考えよう あいての気もち 自分の気もち

## 小学校第三学年

ありがとう えがおになれる まほうの言葉

手をとりあい みんなでつくろう 明るい未来

けんかをして仲直り「ごめんなさい」は まほうの言葉

ごめんなさい 言えるゆうきが かつこいい

それぞれの 多様さみとめ 明るいみらい

身につけよう 思いやりの心と やさしい笑顔

声に出そう みんなもつてる やさしい気持ち

## 小学校第四学年

友達と みんなでつくる 心のわ

わになって 手をつなごうよ 友だちだから

変わるなら 相手じゃなくて 自分から

がまんしない じぶんの気持ち 伝えよう

「大丈夫？」 その一言が うれしいよ

支え合い みんなでつくろう 仲間の輪

明治南小 佐藤 柊希

本郷小 青柳 愛花

本郷北小 加藤 優里香

上三川小 猪瀬 陽子

坂上小 廣瀬 颯真

北小 小森 翼

明治小 栗原 凜

明治南小 平野 裕慎

本郷小 余川 聡祐

本郷北小 金子 紬

上三川小 野村 琉威

坂上小 荒川 佑志

北小 高橋 凜

明治小 張替 紗奈

遊ぶとき みんな仲間に 入れようよ

明治南小 高橋 昊斗

小学校第五学年

大丈夫 きみには 味方がついている

本郷小 浜野 竜維

地球とは 人つて色の 集まりだ

本郷北小 小野田 登海

気にしない あなたの個性 大切に

上三川小 上野 椋

つらいとき みんなで遊べば 良い気持ち

坂上小 白石 雅人

無理しない いやなことあっても ぼくが聴く

北小 小笠原 淳

だいじょうぶ？ 傷つけているかも その言葉

明治小 稲見 彩夏

気づこうよ 相手のやさしさ 思いやり

明治南小 早瀬 友陽

小学校第六学年

性別関係ないよ 多様性 大事にしよう

自分らしさ 本郷小 谷田部 拓真

君がいて 救われる人 何億と

本郷北小 大杉 泉心

分かり合う その日を目指し 手をつなごう

上三川小 増田 晴音

つらいこと 話してみよう だれかにさ

坂上小 野口 智樹

話す前に 相手がどう感じるか 考えよう

北小 川出 翔陽

助けるよ 心に笑顔を 灯せるように

明治小 権瓶 励

十人十色 みんなの個性は いろとりどり

明南小 田部 いろは

中学校第一学年

君と私 どちらもちがって 「個性」です

本郷中 吉澤 芽依

さしのべよう 勇気 優しさ 思いやり

上三川中 古瀬 夢空

合わせよう 目線も心も 同じ高さに

明治中 神部 心来

中学校第二学年

認めよう 個性は特別 皆が特別

本郷中 鶴見 煌也

つらいなら 一人で悩まず 頼ってよ

上三川中 伊沢 優陽

助け合い 周りを頼ろう ひとりじゃない

明治中 仲田 芽生

中学校第三学年

個性を認めて みんなで作ろう 多様性の社会

本郷中 木暮 紗雪

傷ついてない？ その言葉に 傷つけてない？ その言葉で

上三川中 粕谷 秋音

考えよう 一つの言葉の 責任を

明治中 久保田 湧也

## 発刊によせて

創作折り紙の第一人者として、世界中の折り紙界から「Origami God」として知られる吉澤章氏は、オランダ・アムステルダムでの展覧会を皮切りに、世界各国で創作折り紙の普及に努めるとともに、国際交流にも多大なる功績を残しています。

彼が展覧会を開いた当時のオランダでは、日本人に対して、第二次世界大戦を通しての強い負の感情があり、日本人である吉澤章氏も並々ならぬ偏見の目や差別にさらされ、大変な苦労を強いられました。

それでも彼は屈することなく創作活動を続け、次第に彼の人柄や作品は、オランダの、そして世界中の人々の心に浸透し、評価されていきました。

折り紙は「ORIGAMI」として、国籍や年齢、性別、障がいの有無などを問わず、誰もが親しみ楽しむことができます。世界中に折り紙が広がっていくように、人々の心の垣根も取り払われ、誰もが幸せに暮らす未来をつくっていくことが、現在を生きる私たちの使命です。

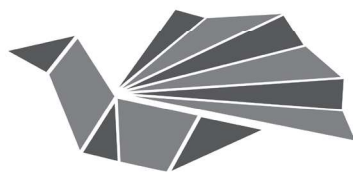
本町においては、国や県の基本計画・方針等を踏まえ、部落解放（同和問題）をはじめとする様々な人権問題の解決を目指して「上三川町人権教育の基本方針」を策定し、学校教育及び社会教育が相互に連携を図り、すべての学校すべての地域において、人権尊重の精神の涵養を目的に、積極的に人権教育及び人権啓発を推進しているところです。

現代社会において、人権課題は多様化しております。上三川町教育委員会では、多様な人権課題に対応した人権教育の取組を、更に充実させていかなければならないと考えておりますので、今後とも皆様の御協力をお願いいたします。

さて、この人権教育資料「だんろ」は、町内小・中学生の作文と標語を掲載しております。これらは、児童・生徒一人一人が、日々の生活の中から考えたこと、気付いたことをもとに自分の考えをまとめたものです。本冊子は、身近なところから、様々な人権問題の早期解決を目指し、吉澤さんが目指した世界の構築に近づけることを願い作成しましたので、ぜひ御一読されますようお願いいたします。

令和六年三月

上三川町教育委員会教育長 氷室 清



ORIGAMI のまち  
かみのかわ

人権教育資料 No. 42

発行日	令和6年3月1日
発行者	上三川町 上三川町教育委員会
住所	栃木県河内郡上三川町 しらさぎ一丁目1番地
電話	(0285)56-9128

